

2. 予 後

冒頭にも述べたように、C型慢性肝炎は自然経過でウイルスが排除され治癒する可能性は極めて低い。しかし、肝硬変に進展する例でも20年以上かかり、一方では何年経過しても軽度の慢性肝炎にとどまる例もみられ、その幅は広い。IFN治療によりHCVが排除されるに越したことはないが、適応外あるいはIFN難治例も多い。ただ、長

期経過のうちにそのウイルス増殖量ないし宿主の免疫応答が変化し、治療に対する反応性が変わる可能性も否定できない。要は長期的視野に立ち、種々の治療を組み合わせながらトランスアミナーゼの低下、肝炎の鎮静化を目指すことであろう。

ただ、慢性肝炎の段階でも肝癌出現をみる例があり、特に活動性の前硬変例では最低半年に1回の超音波検査を要する。

書 評

市川平三郎 監修, 吉田 裕司 著

胃 X 線撮影技術の基礎と応用

馬場 保昌 (癌研究会附属病院総合健診センター)

本書は「胃 X 線診断の考え方と進め方」(1986 年刊)、「胃 X 線撮影の基本と実際」(1989 年刊)に続いて出版された第 3 作目の著書である。既刊の著書を読まれた方々には待望の書である。

本書の内容はルーチン撮影と精密撮影に大きく分かれており、それぞれについて、①撮影の考え方、②撮影の基本、③撮影の実際、が詳細に述べられている。これまでの吉田氏の著書を見てもわかるように、経験に頼るだけでなく、しっかりした検査・診断の論理的背景があるから説得力がある。掲載されている写真は、意図的に原版に近い状態で掲載されているので親しみを覚える。

発泡剤の飲ませ方からバリウムの調合法に始まり、十二指腸への造影剤流出を少なくする工夫や流出した造影剤の移動法、検査中の会話の仕方など、撮影や読影に必要な事柄が詳細に述べられている。さらに、撮影手順、病変部位と至適撮影体位の関係、ローリングの方法などでは、事例を挙げながら“なぜそうする必要があるか”、“その結果どうであったか”についても明快に記述されている。そして、読み終えると、これから X 線検査・診断を始めようとする人に対して“著者と同じ時間と労力を費やさせない”とする心配りが感じられる。本書によって、最近の若い人たちに見られる“消化管 X 線診断

からの逃避”が少なくなることを期待したい。

消化管の X 線撮影法の中で、細かな撮影手技になると言葉ではなかなか表現しきれない面がある。しかし、本書は“なるべく平易な言葉で表現するように努めた”とあるように、著者の X 線検査に対する考え方やその理論だけでなく、取り組み方や姿勢など“吉田流哲学”が十分に伝わってくる。また、本書を読んでいると、著者の恩師である市川平三郎先生(国立がんセンター中央病院名誉院長)の指導法が分かるような気がする。もちろん、小生自身は市川先生から直接に指導を受けたことはない。恐らく、若い先生たちに対しては“技術論”より“見方・考え方”の面を厳しく指導されていたに違いない。このように問題意識を持ち思索する習慣は、次の世代へきつと受け継いでいかれることであろう。

本書は「撮影」、「読影」、「診断・鑑別診断」の胃 X 線診断の 3 つの要素のうち撮影に焦点を当てたものであり、著者の 3 部作の完結編ともいえるものである。それだけに著者の最大限の心配りがなされている。その意味で、これから胃 X 線検査や診断を学ぼうとする人には必携の書であり、また専門家にとっても本書から学ぶべきことがたくさん凝集された良書である。

(B5判 328頁 10,300円(税込) 1994年 医学書院 刊)